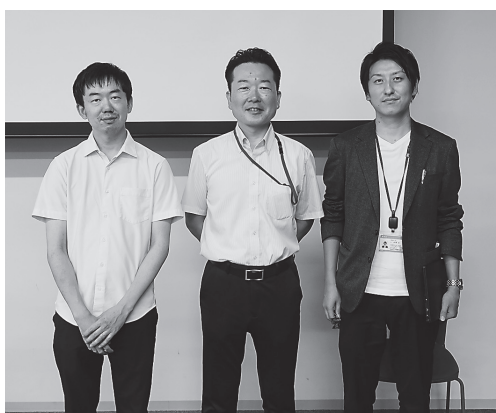


データサイエンス教育開始

京都薬大 京都女子大との連携で

京都薬科大学は、京都女子大学と連携してデータサイエンスと薬学を掛け合わせた教育や研究に取り組んでいる。その一環として、15日から京都女子大教員の協力を得て、3年次後期の学生を対象に「臨床統計開発論」の講義が始まった。同領域の教育は、来年度の1年生から適用される薬学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂で重視されており、それを先取りした。学生に将来、様々な医療データの電子的な蓄積や共有が進む社会で働くイメージを持ってもらいたいと考えた。

同日実施した第1回目のも、大きなデータとして構講義で、京都薬大の村木優一教授は、「社会のあらゆるものが電子化、情報化され、社会に還元するのがデータサイエンス」と説明。特に、電子カルテ情報などを集積した医療リアルワールドデータ(RWD)を



臨床統計開発論の約半分の講義を担当する村木教授(中央)、地寄悠吾助教(左)、冨瀬諒助教(右)

が注目されているとし、医療RWDは、様々な医療者が多くの時間を割き、患者一人ひとりの治療に関わった結果の集合体。貴重なデータをただ蓄積するだけでなく、解析する力を持つことが、次の医療につながる」と学生に投げかけた。京都薬大は、昨年6月に京都女子大と協定を締結。4月にデータサイエンス学部が発足した京都女子大と連携して、同領域の教育や研究を進めている。その一環として、既存の統計学関連科目を改変し、臨床統計開発論を設置した。

京都薬大の教員4人と京都女子大の教員2人が分担して講義を受け持ち、3年次後期の必修科目として計14回の講義を実施する。医療統計に関するデータ解析方法、医療RWDを用いた研究やビッグデータの活用、臨床研究を行う上で注意すべき倫理的配慮などを教えて、医療現場で医薬品の統計的評価を正しく行える力を養成する。

村木氏は「これから医療のあらゆる情報が電子化され、医療従事者が活用する時代になる。それを分かった上で、疫学や統計学などの手法を学んでもらいたい」と語る。データサイエンス領域の知識やスキルは医療現場で役立つだけではない。京都薬大の栄田敏之教授は「製薬企業や行政など薬業界全体で、生物統計に長けた人材が不足している。そこへの就職を目指す学生に向けても、教育を充実させる必要がある」と話す。

両大学の連携を踏まえ、今秋にはシンポジウムを開催する計画だ。